

Acts 26:24-32, 27:1-13

(使徒26:24-25)「パウロがこのように弁明していると、フェストが大声で、『気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂わせている』と言った。するとパウロは次のように言った。『フェスト閣下。気は狂っておりません。私は、まじめな真理のことばを話しています。』」

ここで邪魔が入ったのは、パウロにとって不運だったように思えます。でも、パウロがどれほど礼儀正しく彼に答えているか、見てください。確かにパウロの冷静な応答は、彼が気が狂っていないことと、狂信者でないことを証明しています。

私たちの時代には、多くの証人たち、特に牧師たちが、知識人であるように見えないのではないかと、狂信的に思われるのではないかと恐れるあまりに、福音の偉大な真理を宣言しようとしません。私たちは、進んで間違いだと思われようではありませんか。でも、間違いのように振舞ってはなりません。私たちは、パウロがしたように落ち着いて福音を語らなければなりません。

総督フェストに答えてすぐ、パウロはアグリッパ王に質問をします。

(使徒26:26-27)「『王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げているのです。これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます。アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います。』」

そのことが自分にとって何の意味もないまま、事実を信じることは可能です。あなたは福音の事実をご存知かも知れません。イエスさまが自分の罪のために死んでよみがえられたことです。でも、肝心なのは、これらの事実に対して自分がどういう関係をもっているかなのです。

(使徒26:28-29)「するとアグリッパはパウロに、『あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている』と言った。パウロはこう答えた。『ことばが少なかりと、多かりと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになってくださることです。』」アグリッパは頭の良い人物でした。彼は答えました。

「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」

人はほとんどクリスチャンになりかけて、その後永遠に失われることがあるというのをご存知でしたか？それは何と悲劇的であることでしょう！「ほとんど」ではだめなのです。クリスチャンになるかならないか、どちらかしかありません。キリストを受け入れるか、受け入れないかどちらかです。どんな神学者も、救いの深さとその意味とを徹底的に探ることはできません。それでも、救いの深さと意味とは、私たちのようなごく普通の人々に理解できるほど簡単なことなのです。キリストをもっているか、もっていないかのどちらかです。キリストを信じるか、信じないかのどちらかです。主が自分の救い主であるか、そうではないかのどちらかです。ふたつのうちのひとつです。中道などというものはありません。“ほとんど”はあり得ないのです。すべてでなければなりません。

パウロは答えました。

「私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになってくださることです。」

パウロは彼らに、鎖は別として、自分のようになってキリストとの関係をもってもらいたいと願っていると言っているのです。パウロは誰も鎖につながれて欲しいとは思っていなかったことでしょう。

この人は、プライドの高い、熱心なパリサイ人だったのです。この人は、数年前までクリスチャンたちを鎖で縛って、彼らに死をもたらした人物です。今、彼の態度は違います。彼は今は、すべての人がクリスチャンになって、イエス・キリストとの生き生きとした個人的な関係をもつて欲しいと願っているのです。

タルソのサウロの中で起こった、すばらしい変化には、びっくりせずにはいられません。それをどのように説明したらよいでしょう？その説明は、イエスさまは“生きておられる”ということです！主は死から帰ってこられたのです。パウロが、アグリッパの前での証しの中で、とても早くから

(使徒26:8)「神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。」

と言ったのはそのためです。そこには何の不合理もありません。1900年間(2000年間)にわたるいろいろな分野における人間の知識の進歩によって、よみがえりは今の時代、もっと信頼できるようになりました。実際、この当時の人々よりも私たちにとってのほうが、よみがえりは信じやすいはずです。

イエスさまは死から帰って来られたのですから、主はもう一度来られ、やがて来るさばきもあります。もうひとつの王座もあって、イエスさまはそこに座しておられます。そして、もうひとりの囚人もいます。その囚人はあなたか私です。主の前に頭をたれて主を自分の救い主として信じるか、あるいはそのさばきの日に主に対して申し開きをするか、どちらかです。よみがえりは、救われている人にとって大切であるのと同じように、救われていない人にとってもとても大切なことです。

(使徒26:30-32)「ここで王と総督とベルニケ、および同席の人々が立ち上がった。彼らは退場してから、互いに話し合って言った。『あの人は、死や投獄に相当することは何もしていない。』またアグリッパはフェストに、『この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであらうに』と言った。」

今や、パウロがローマに行くことは明かです。パウロがカイザルに上訴したことは、正しいことだったかどうかを取りざたする人たちがいることは前にも言いました。パウロは間違いを犯したとを感じる人たちもいます。私は、これはまったく間違いなどではないと思います。

ローマ人への手紙の中で、パウロはローマへ行きたいという願いを表現しています。

(ローマ1:10-11)「いつも祈りのたびごとに、神のみこころによって、何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに行けるようにと願っています。私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。」

彼は確かにローマに行きます。彼にとって「道が開かれた(訳注:英語では、『神のみこころによって prosperous journey つまり‘順調な旅’ができて、あなたがたのところに行かれるように』と表現されています)」のかどうか、疑問に思えるかもしれません。ミニストリーをしている私の友人が、若い人たちのためにシリーズでメッセージをしました。ついでながら、それはとてもすばらしいシリーズですが、そのタイトルは、「パウロのローマへの順調な旅」というものです。(訳注:日本語訳にそうように訳せば、「道が開かれたパウロのローマへの旅」というところでしょうか。)パウロが神さまのみこころによってローマへ行ったのですから、これは順調な旅だったのです。

27章

テーマ:嵐と難船を経て、パウロはローマに行く。

この海路の旅は、パウロの第四回伝道旅行と呼んでも良いと思います。彼はローマに行ったとき、それまでと同じように活動的で、同じ自由を行使し、同じように多くの人たちと接触し、他の伝道旅行のときと同じように、誠実に証しをしました。この旅行中はずっと鎖につながれていたにも関わらず、その鎖は彼を邪魔することはありませんでした。パウロは、次のように言ったのです。

(Ⅱテモテ2:9)「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のこゝろは、つながれてはいません。」

また、彼はピリピ人たちに、自分に起こったことが福音を前進させることになったと書きました。(ピリピ1:12参照)

(ピリピ1:12)「さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。」

このすべてのことの中に神さまがおられるのです。今回の旅は、ほかのときとはちょっと違うものになります。今回の旅は、ローマ政府がお金を出してくれます。なぜなら、彼はローマの囚人だからです。これは、ローマに行きたいというパウロの祈りの成就です。

パウロが自分のケースをカイザルに上訴したとき、彼は総督フェストとアグリッパ王の支配のもとから外に出されました。アグリッパ王がパウロのケースを公聴したあとに、

(使徒26:32)「この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに」

と言ったように、今は彼らは何もすることができませんでした。彼らはパウロをローマに送らなければなりません。

使徒の働き27章には、パウロのローマへの旅が記録されています。ここにあるのは、船の航海日誌と呼んでも良いでしょう。使徒の働きのこの章は、今日記録に残っている、古代の世界における航海のもっとも立派な解説であるとされて来ました。ウィリアム・ラムゼイ卿は、医師であるルカの著作を研究し、この27章を傑作であり、これまで書かれたすべての物の中でもっとも正確であると評価しています。ですから、ご覧のように、聖書の中のもうひとつの偉大な章に私たちはやって来たのです。

ラテン語でシーザーのことを勉強したことがある方たちは、橋を建設する記事があったことを思い出されるかもしれません。その記事は、いつでもすべてラテン語を勉強したことのある人たちの記憶の中に、目だって残る箇所です。なぜなら、橋の建設に関するとても多くの新しい単語が出てくるからです。ギリシャ語でのこの27章は、それに匹敵します。なぜなら、ルカがこの旅を説明するために使う、多くの技術的な言いまわしが出てくるからです。

さあ、使徒パウロと一緒に船出しましょう。私たちはローマに向かって航海します。これは、使徒の働きの中で最後の、もっともエキサイティングな旅行記です。

パウロの、順調なローマへの旅

(使徒27:1)「さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロと、ほかの数人の囚人は、ユリアスという親衛隊の百人隊長に引き渡された。」

これは、イタリアへの旅の始まりです。他の数人の囚人たちとともに、パウロはユリアスという名前の百人隊長に引き渡されます。囚人たちの中でローマ市民だったのはパウロだけだったと言っても過言ではないと思います。おそらく、他の者たちは死刑にされるためにローマに送られたのでしょう。彼らの多くは闘技士 (gladiators) になり、野獣のエサになったのです。この当時、帝国中のいたるところから、このローマのコロシウムでの公共の悪徳行為に、人間のいのちが続々と送り込まれていました。この囚人たちには、全く望みはなかったのです。この階級の人たちに希望の福音を伝えるために、このことがパウロにどれほどのチャンスを与えたことでしょうか。主イエスご自身も、ご自分が来られた理由のひとつは、囚人を解放するためだと言われたことを思い出されることでしょうか。彼らをその罪から、そして彼らの罪悪感から解放して、霊的な自由を与えるためでした。

この百人隊長ユリアスは、これから見て行きますが、とても礼儀正しい人でした。

(使徒27:2)「私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行くアドラミテオの船に乗り込んで出帆した。テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した。」

ここでも、この旅を地図上で追って行くなら、よりよく理解するための助けになります。今、彼らはイスラエルの海沿いを北上して行くことに気づかれるでしょう。言い換えれば、彼らは出発地点から直接海に出て、そしてローマに着くのではない、ということです。船は海岸線沿いを進み、イスラエルの海沿いを北上します。

(使徒27:3)「翌日、シドンに入港した。ユリアスはパウロを親切に取り扱い、友人たちのところへ行行って、もてなしを受けることを許した。」

シドンはおなじみの場所です。ツロとシドンは、北のフェニキヤの海岸沿いにあり、フェニキヤは現在のレバノンの国です。

使徒パウロに与えられた自由を見てください。私は、パウロがこのローマ人の役人に福音を宣べ伝えたのだと考えています。彼はパウロに親切です。偉大な使徒パウロでさえも、クリスチャンの兄弟たちとの交わりと、彼らから元気づけられることが必要でした。その必要のない人など、だれもいません。私たちには、お互いの理解と励ましが必要なのです。

（使徒27:4）「そこから出帆したが、向かい風なので、キプロスの島陰を航行した。」

「キプロスの島陰」とは、実際、彼らがキプロスのはるか南側に来たことを意味します。それは、彼らが北風に会っていたことを示しています。

（使徒27:5）「そしてキリキヤとパンフリヤの沖を航行して、ルキヤのミラに入港した。」

私たちは、前にもパウロと一緒にここに来たことがあります。彼らは今、小アジアの南岸沿い近くを航行しています。

（使徒27:6）「そこに、イタリアへ行くアレキサンドリヤの船があったので、百人隊長は私たちをそれに乗り込ませた。」

地図をご覧になると、ミラはスタート地点のような場所だったことが分かります。彼らはこの場所で船を乗り換えました。百人隊長はアレキサンドリヤの船を見つけましたが、それはその船が北アフリカから来て、イタリアに向けて航海していたことを意味します。

（使徒27:7-8）「幾日かの間、船の進みはおそく、ようやくのことでクニドの沖に着いたが、風のためにそれ以上進むことができず、サルモネ沖のクレテの島陰を航行し、その岸に沿って進みながら、ようやく、良い港と呼ばれる所に着いた。その近くにラサヤの町があった。」

彼らはクレテ島に向かっていました。見たところ、まだ航海は大変だったようです。この当時、向かい風は船にとって大きな困難でした。彼らは島の南側を通して、クレテ島の南岸にあるラサヤにきました。

（使徒27:9）「かなりの日数が経過しており、断食の季節もすでに過ぎていたため、もう航海は危険であったので、パウロは人々に注意して、」

これは、季節も遅くなっていて冬が来ようとしていたことを意味します。彼らは嵐の季節の前にローマに着きたいと願っていました。面白いことに、この時点で、パウロは道徳的に彼らよりも優越になっています。航海が危険になったとき、パウロは彼らに注意を与えました。

（使徒27:10-11）「『皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます』と言った。しかし百人隊長は、パウロのことばよりも、航海士や船長のほうを信用した。」

百人隊長のしたことはもっともです。結局、パウロよりも船の船長のほうが航海についてもっとよく知っていると思いますよね。

パウロはここで本当に試されています。彼は確かに目立ちます。彼は、提案をします。その提案は、従っておくべきだったとあとから彼らに分かります。パウロが霊的に優れていることはこの時点で明らかです。パウロの人生には、混乱も、不確実さも、欲求不満もありません。彼は、いわゆる落ち着いた性格の人です。パウロは自分の行く道を知っていました。彼がローマについたときには、彼は「私はこのひとつのことをする（This one thing I do）」と宣言しました。私たちは彼の落ちついた振る舞いの性質を、旅の間中見ることができます。パウロは、神さまと接触を保ちながら生涯を送りました。

（使徒27:12）「また、この港が冬を過ごすのに適していなかったので、大多数の者の意見は、ここを出帆して、できれば何とかして、南西と北西とに面しているクレテの港ピニクスまで行って、そこで冬を過ごしたいということになった。」

クレテは、小アジアの沖、またギリシャの沖に位置する島です。この島は島々の間で最大で、いくつか良い港があります。

これから起こることは、パウロが正しかったことを証明します。この旅を通して、百人隊長も、兵士たちも、また船員たちも、人間の憶測だけに頼っていました。パウロは神さまを当てにしていました。

（使徒27:13）「おりから、穏やかな南風が吹いて来ると、人々はこの時とばかり錨を上げて、クレテの海岸に沿って航行した。」

彼らにとって、航海は当て推量でした。穏やかな南風が吹いたので、彼らは「この時とばかり」出かけました。百人隊長は、自分と、人間の知恵を 当てにしている人でした。パウロは神さまを当てにしていました。パウロはあとになってこの人々に（使徒27:25）「私は神によって信じています」と語ります。

人生は大きな海であり、私たちの人生は小さな舟です。もし私たちがそのように選択するのなら、私たちは自分の小舟を人間の推測で航行させることができます。海には嵐が吹いています。爆風です。悲劇なのは、混乱と、世の混沌とそして暗闇の中で、ほとんどの人たちはまだ推測しているのです。より良い世界を築くための、千もの人間の計画があります。でも、私たちが見渡す限り、そこには失敗があるのです。私たちには、神さまを“知っている”人々が必要です。

「偉大な政治家のしるしは、これからの50年、神さまがどの道に行かれるかを知っていることだ」
と言ったのは、グラッドストーン（Gladstone : 19世紀イギリスの政治家）でした。今日私たちのまわりには多くのそのような人々を見つけることはできないようです。